

兵庫県劇団協議会機関紙

for you

vol.16

兵庫県劇団協議会 事務局

〒651-2133 神戸市西区枝吉3丁目6-4

公式サイト <http://www.hyogekikyo.com>

事務局メール info@hyogekikyo.com

劇

ひょうげききょう どっとこむ
hyogekikyo.com

- 新代表あいさつ ①
- 兵劇協総会 & 懇親会 ①
- 座談会 ②▶⑦
- 加盟劇団活動報告 ⑧▶⑩
- 加盟劇団連絡先 ⑫

新代表あいさつ

私が所属する自由人会では、私はもうすっかり年寄り扱いされていますが、皮肉なことに兵劇協では若返りの世代交代を計っており、先輩方のご推薦を受けてこの度定期総会に於いて代表に就任させて頂くことになりました。

百年に一度という未曾有の経済不況は演劇界にも暗い影を落としています。人材不足、残業による稽古時間の不足、集客の低迷、...等々、劇団活動を根底から揺るがす厳しい時代に直面しております。

でも、こんな時代だからこそ、この現実を乗り越えていく、より深い「創造力」が必要になるのではないのでしょうか。どんな生活がしたいのか、どんな社会を望むのか...



森もりこ

一人一人の心を育み、未来を切り開いていく創造が求められていると思います。

ヴァーチャルな文化の際限なき氾濫に對置して、今こそ生きる喜びと未来への希望を灯す演劇が必要とされるのではないのでしょうか。又、そのことが、この厳しい現実を打ち破り、明日の生活の糧へと繋がって行くものと信じています。

兵劇協は8年後に50周年の節目を迎えます。50周年に向けて合同公演等の特別企画を検討しています。どうか今まで以上にご支援ご指導を賜ります様に心からお願い申し上げます。

劇団自由人会代表

平成22年度総会 & 懇親会

兵劇協の平成22年度総会 & 懇親会は1月11日、新長田「劇団どろ」の新稽古場において、11劇団、45名の参加のもと開催されました。

活動の報告や活動方針が討議され、新役員を選出しました。新しく広い稽古場で老若、入り乱れての懇親会、盛り上がりました。



ニュース!

2010年5月15日、兵劇協の公式HPがドメイン取得の上、オープンしました。加盟12劇団の公演情報や最新ニュースはこのサイトでご覧下さい。

<http://www.hyogekikyo.com>

兵劇協

検索

本年度の総会 & 懇親会から





座談会

どっこい、地域演劇は生きている！

- 座談会・参加者 菊池照一（神戸職演連）、合田幸平（劇団どろ）、小林みね子（劇団プロデュース・F）、今泉修（自由劇場）
大楽亮（県立ピッコロ劇団）、三村省三（神戸ドラマ館ボレロ）、蓬萊裕史（劇団風斜）
村井伸二・大西衛一（劇団四紀会）
森もりこ・ふるかわ照・平野拓（書記）（劇団自由人会）

平成22年4月4日、劇団自由人会の稽古場をお借りして、兵劇協加盟劇団の有志が集い、座談会を開催しました。経済が低迷する中、各劇団の活動も先が見えない状況ですが、劇団の現状と今後及び演劇創造の実際について、3時間を超える熱い話が交わされました。尚、誌面の制約上割愛した箇所があります。

大西 今日の座談会のタイトルは、『どっこい、地域演劇は生きている！』です。噛み砕いてそれぞれが自分の言葉で話し、議論が深まればいいなと思います。それでは進行は蓬萊さんに、書記は平野さんをお願いします。



蓬萊 こういう時代なので明るい展望が見えてくるとは思えないし、しんどい話し合いになるのではと思います。先ずそれぞれの団体から「我々はこういう思いで活動し、それは、こういう意味を持っている。」という辺りからお願いします。

大西 うちの劇団員の話ですが、かつては職場に同僚が大勢いて、演劇をしていることに応援してきていましたが、経済が低迷し、人減らしが激しくなってきたり、演劇にかかわる者は周りに気を使い、遠慮しながら職場を後にせざるを得なくなってきました。だから職場でチケットを売ることも難しいと、よくこぼしています。以前は午後7時に稽古を始められましたが、今は8時以降にしか集まりません。翌日の仕事を考えれば遅くまで稽古もできないし、稽古時間がとれない状況で、芝居の仕上がりにも影響を及ぼしているのが現状ですね。

蓬萊 そうです。演劇をやっている我々の置かれた状況の問題は大きいですよ。自分達の活動にどんな意味があるのか、世の中に必要なのか、演劇をやっていることに大義名分を持つ必要性を強く感じています。また、演劇の公共性、社会性、あるいは教育に資するものであることなどが、近頃盛んに言われています。まあ、我々は社会的にこんな素晴らしいことをやっているというより、大西さんの話した劇団員の置かれた立場を考えてみた方が、演劇本来の姿が見えてくるんじゃないかな。



三村 あの、劇団員だけでなく、関西で芝居をしたいという人に、神戸に受け皿があるって大事だと思う。仕事との両立が難しいからプロ志向のところを探してみたいとか、そういったことの相談ができる窓口を作る必要があると思います。神戸の劇団はどこも弱ってきてますから、演劇の意義を問う前に、芝居をしたい若者の窓口には兵劇協がなれないかと思っています。

蓬萊 演劇は東京一極集中の感がありますが、東京へ行ったからといってどうにかなる時代でもなく、抜き出ているところはホンの一握りで、演劇の環境が整っているというくらいかな。むしろ地方の方がやりたい芝居ができるのではと感じますので、その辺りを兵劇協がアピールできないかな。



大楽 今、商業的に成立している事務所や有名劇団は全国に10%ぐらいで、演劇活動の評価はそこに向いていると思うんです。しかし、地域には、演劇で何かを表現したいというテンションを持った人たちが必ずいて、その人たちによって日本の演劇は成り立ってきたんだと思います。公演数やステージ数の8割強は、これらの集団・劇団の舞台だってことが、今後の演劇を考えるには重要ですね。近頃「劇場法」(仮称)が話題になっています。全国で80館程を指定し、そこを拠点ホールとして事業費等を出す。そのホールが演劇事業を展開する場合に、最も期待されるのは事業への参加人数で、不特定多数の集客が出来なければいずれ外されます。ホールも演劇以外の事業に移行していく図は想像がつかます。その時、ただでさえ脆弱な地域の演劇基盤は根底から崩れ、演劇を志す者の意志は淘汰されているという危惧を感じています。

合田 話が噛み合うか分からないけど、うちは今年45周年なんです。よく続けてきたとも思うけど、関西にはざらにあるんですよ。劇団の歴史は、人間に例えたらもう衰退期に入っている。80年代は元気だったが、最近は何も集まらないし、若い人は入ってこない。去年、稽古場を出ていかなければならなくなったことも重なって、これで幕引きをしようと“さよなら公演”をやったんです。そしたら、入りきれない程観客が来て、帰ってもらった人もいるぐらいでした。意外だったのですが、何人もの客に、他所へ移っても続けてほしいと言われたんです。たしかに今まで見続けてくれた人たちとの関係を切ってしまうのはもったいないと本当に思いました。お客さんとの濃密な関係が生まれてきたのも確かで、人と人が繋がってやっていかなければいけないと強く感じました。でも、見通しはないですね。



そんな訳でいろいろ悩んで、3月の始めにドイツへ芝居を観に行ってきました。ドイツはオペラ、演劇など文化的なものにふんだんにお金を使う国で、各都市にオペラハウスや劇場があって、それぞれが独自に州から予算をもらって、運営にかかる経費のうち入場料の占める割合が9%。しかもオペラ一本を6000円ほどで観ることができ、60人のオーケストラに200人ぐらいの出演者が入れ替わり立ち替わり衣裳を変えて出てくる。毎晩公演を打って、客もいっぱい入っている。劇場法もそういうものを目指しているのかもしれないが、果たしてうまく機能するのだろうか。

蓬萊 劇場法はつまりは「選択と集中」ですよ。効果のあるところに重点的に金を出すという発想しかない。兵劇協に限らず、地域劇団が減少して行って、その時にどうなるのだろうか、地域や演劇は何も困らないのだろうか。

村井 僕は今名谷に住んでいて団地自治会の“ふれあい喫茶”というのがあって、そこに集まっているおじいちゃん、おばあちゃんが一本芝居を創りたいと言ってきたり、小学校区のPTAで何かしたいという時に僕が芝居をやっているのを知っていて声をかけてきますけど、そういう時に相談に乗ってあげられるという地域劇団の存在は必要かな。

蓬萊 つまり「どろ」や「四紀会」や「F」も、地域の素朴な演劇活動をしたいと思っている人たちのコアになっていると思いますよ。45年間の活動の中で「小さい」が故に「濃密」な関係を地域の中で構築してきたことが、我々が何をやってきたかの証であり、誇りに思いますね。

合田 そう、それぞれの劇団がやってきたことに意味はあると思うし、多少違った芝居をそれぞれがやっていて、小さいけれど濃密な関係を創ってきた。社会性って、こういった普通のことを指すんですよ。

蓬萊 合田さんの話で引っかかるのは、ドイツでは行政サイドの支援があるから出来ているんだと聞かえる。そのことには違和感があります。どろがやってきたことはささやかだけど素晴らしいことだと思う。地域の中でどろが消えていく風景が寂しいからこそ続けてくれと観客が言う。そのことと行政の支援とはどう繋がるのか、意見をもらった方がいいかな。

合田 僕は芝居は支援がいると思う。ヨーロッパでは、入場料だけで賄うことは不可能で、贅沢だけれど必要なもの、行政の支援があって当たり前という図式が出来上がっている。日本はほとんどの劇団が自力でやっている。やれない事はないが、芸術や文化の恩恵を多くの人々が享受するまでには至らない。我々にもほんの少しだが助成があり、それで続けていけることもあるので、社会に貢献しなければならないだろう。効果のことを考えると、助成額はもっと大きくないといけないと思いますね。



三村 行政云々より、我々の劇団は6人からスタートし、だんだん人が減ってきて、今まで関わってくれた人が、職場の関係やら何やらで消えていってしまって、人が増えていかない。若い人が観て、こんな芝居だったら自分もやってみたくて入ってくればいいが、そういうふうにはならない。ああ、自分達の芝居は若者にとって魅力がなく、力が無かったんだと実感する。演劇の意義はといった議論の前に、我々、創る側に責任があるのではないかと、この頃思うんです。

大西 合田さんは先程、さよなら公演をやって、観客からもっと続けてくれと言われて初めて自分達の芝居はこの人たちにとって観たい芝居だったんだ。45年は無駄ではなかったと気付いたと言いました。「神劇まわり舞台」は今年27回目、1年あたり平均2000から2500人が観てくれて、26年続いている。我々はそこに観続けてくれる人が確かにいるんだと改めて気付かされる。そのことはとても大事だし、実はスゴイ事なんです。

蓬萊 姫路で継続的にやっているのはプロデュース・Fさんですが、今の話はどう思いますか。

小林 東京と神戸を比べると同じくらい、神戸と姫路は距離があるんです。だから逆にやり易いという気もします。姫路周辺の揖保川町とか神崎町などで地域住民が行政と一緒に村芝居の様なものを創ろうとしているのを見て、ああこういう小さい行政の方が楽しいものが創れる可能性があるなと思います

ね。我々も市制百周年の記念演劇などを依頼され、行政と一緒に創ってきましたが、確かに行政支援は経済的には助けられていると思います。

大西 蓬萊さんは行政からの支援にはあまり乗り気ではないのですか。

蓬萊 ドイツなどヨーロッパではオペラや演劇などが根付いていて、そこに公金を使うことに理解が得られるが、日本では不況対策にもっと金を使えという様な議論が先にたって、単純に論じられないので言わないのです。共同体の村芝居を創るといふ様な場合はその地域の誰もが待ち望んでいるものだから、そこに公の金を使うことに文句は出ないでしょう。

今泉 欧米諸国と日本との大きな違いは、欧米諸国には学校の教科の中に演劇関係の教科が大体あるんです。音楽や美術と同等に演劇がある。ところが日本では演劇はない。だから一生演劇に触れることなく過ごす人が大勢いる。そういう訳で日本では演劇といえば好きな者が勝手にやっているという意識が世間一般に拡がっている。

蓬萊 僕も神戸市の助成を少しは受けていますが、公平性の原則とか、受ける側の劇団の演劇の方向性



とか、色んな問題があるんです。たとえ反社会的であろうと一律に助成するのか、選択と集中でピンポイントに公の金を出すのか、助成をどう捉えるかというのはかなり難しい問題だと思います。

小林 あの、プロデュース・Fは恒常的に助成金をもらっている訳ではないので念のため。ただ私達は姫路市や文化振興財団の職員の方々と日頃から仲良くして、色んな情報が入ってきます。時にはしんどい目に合うこともありますがお互い様です。でも、お金出してもらってるからといって、芝居の内容にまで口出しされる様なことであればもうつもりはありません。



大西 垂水のレバンテホールがネットで自由人会を見つけて一緒に芝居を創りたいと言ってきたんですよ。どういう内容かという、定年を迎えた人達が何をしたらいいのか分からない。垂水の担当者は街を活性化するためにも何とかしたいと思って連絡を取ってきたらしい。その辺の話をしてもらえますか。

森 垂水の話ですが、老人会とか地域の自治会などに当たっていくと、晩年を迎えた人たちは、残された時間をどう有意義に過ごすかに関心が強く、それを探している人は多い。今、5人に1人は65歳以上なんです。我々が目指すはその人たち。豊かな老後を願っている人たちを観客に取り込んで、有意義な時間を過ごせるような作品を創っていこうと考えています。垂水の場合は、会場費がタダというだけで助成金が出る訳ではありません。ですから、参加者に集まってもらって何回かミーティングを持ち、芝居にしていく。そうすればその人たちが観客になってくれる。このところ、助成金もどんどん減ってきているので、それに代わる行政とのタイアップの方法を兵劇協として考えていければと思います。

蓬萊 先程の街づくりですが、「街づくり」「人づくり」と言った時に、ある種の教育活動やワークショップやシニア劇団といった活動を指しているのだとすれば、多くの若い子たちの劇団は公共性が無いということになる。そういう活動をしていない劇団は社会的にどんな役割を果たしているのかということをやうまくすくい取らないと。奉仕活動的な演劇活動をしていないと公共性がない。そういう論理をどう乗り越えるのかということを行っているんです。だから反体制でも行政は金を出すべきだと僕は思うんです。

ちょっとここで一服いれましょうか。



蓬萊 さて、好きなことをやっていると、なかなか言いにくいところがある。それで、違うと言ってしまったんですが、地域性のある芝居をとすると、姫路でいえば、姫路城物語をやらなければならないとか、ある種地域に密着したというイメージがありますよね。

小林 姫路は芝居の場所があり人がいる。そういう街でありたいと思うから続けてこられたんだと思います。姫路には「姫路地方文化団体連合協議会」があって、私が芝居を始めた20歳の頃、協議会の十周年の記念事業で「戦後演劇史、美術史、文学史」という、戦争直後からその時までの歴史を紐解いた展示会と年表作りに参加したんです。多くの人に会い、色々な方と知り合えました。今、私たちは芝居をしている。戦前も、戦争中にも芝居をやりたい人がいて、どんな状況下でもやっていた。姫路ってそういう所なんだと思えたから、今も続けられていると思うんです。うちの代表はもう80歳なんです。学制が新制に代わった時、高校3年生だったんです。昭和23年頃、まだまだ「男女席を同じうせず」といった時代に男女共学になって、学校に演劇部を作ったんです。当時、朝日新聞に「青い山脈」が連

載され、これを自分達で芝居にして、公会堂で発表したりして、そこから戦後の姫路のアマチュア劇団がスタートしたんです。今私達はそういうものを手渡されてきています。しかし、次に手渡すことも出来ずに無くなってしまいそう。継続していかなくちゃという責任感に近い気持ちが支えているんです。当時の年表を見ていくと、戦後の姫路の演劇史のなかで、この時ってこんなに輝いていた時代だったんだとか、こうして積み上げてきた時代なんだとわかるんです。だから今、ものすごく低迷していて、劇団員がどんどん減って、家賃が払えなくなりそうで、まあ5年後無くなっているかもしれない。あとの時代の人が、あの時この人たちこんなにしんどかったのに頑張ってたのかと思ってもらえたら。

蓬萊 なる程、どろさんの話にも関係するんだけど、「継続は力」といように、小林さんの言う、演劇活動の流れを断ち切ってしまうてはいけないという思いはありますよね。これって、結構大事だと思うんです。さっきの合田さんの話もそうだし、その辺りどうです？

合田 蓬萊さんが言うように、芝居をやることは生きることだという様に、やっぱり廃めるということは自分が生きていることを止めることと同じだと感じますね。



蓬萊 僕もそうですよ。菊池さんの場合もそうでしょう。演劇活動を廃めるとなんか人生を止めてしまう、幕が下りてしまう。そんな感じでしょう。

菊池 みんなが声をかけてくれることが生きがいですね。一つには演劇があるからで、もしなくなったら一人暗く暮らしている。みんなが声をかけてくれるから、自分もよし何かを発表したい、意見を言いたいという気持ちが湧く、そういう気持ちがずっと継続している。好奇心が湧くというのが大きいのかな。

蓬萊 地域に根差すといった問題はピッコロが一番考えるところだと思うんですが、大楽さん何か意見は。

大楽 そうですね。演劇の地域性はずっと言われ続けてきていますが、うちの劇団は東京から作家や演出家や俳優を呼んで15年、東京志向と内外から言われ続けてきました。公立劇団が日本では普及せず、経験豊かな先輩がいないこともあり、競争や目標が見えない分、世界が狭いんです。ここ数年、劇団員も演劇人らしくなってきて、昨年2月に関西で活躍する俳優の方々と一緒に立ち上げた「真田風雲録」は、舞台の評価もさることながら、地域の俳優たちとの相互理解が大きかったのではないかと感じています。ピッコロ劇団にとどまらず、関西の演劇に期待が膨らんできました。

村井 今、作り手の方の話ばかりずーっと出てるけど、お客さんサイドからしたらどんな芝居が観たいかを考えると、社会性とか公共性を考えず、自分達のやりたい芝居をやるということであれば赤字でいいんですよ。観客が集まらない、劇団員が減る、それは当然のこととして活動していけばいい。観客の側からどんな芝居が観たいかと考えれば我慢しなければならないこともあるだろうし、その枠の中でやらざるを得なくなってくる。2025年までどんどん高齢者が増えてくる。60代、70代がどんな舞台が観たいか、それを芝居にすれば、そこそこ当たる。その中に自分の創造性とか芸術性をどれだけぶち込めるか、というのが我々のやっていくことなんじゃないですか。



大楽 観客も創る側も、それぞれに手間をかけて劇場に集います。演劇は、時間と場所を共有することが前提です。これは演劇のジレンマであり、強みでもあります。投下した資本が新たな利益を生むといっ

た論理からは遠い形態なのです。一方、公共という立場は、利益享受の人数が多ければ公金の有効利用が叶ったと考えがちですが、多くの演劇活動の実態から乖離していることに気づきません。劇団や演劇集団は、それぞれの能力に見合った空間とその観客を維持しています。地域演劇の存在意義もそこあります。公演数としては全国の10%強しか占めていない商業系のプロデュース公演が、不特定多数の客が入ることで演劇の中心と考えがちですが、それは、全国の公演数の80%強を占める多くの中小の劇団や集団を排除することとなり、演劇活動の基盤が崩れていく可能性を孕んでいます。劇場の空間の大きさや集客は、作品や出演者に従属します。同じように見える演劇公演も、規模や目的によって全く異なる行為であることを理解しなければなりません。兵劇協に加盟の劇団は、創造過程から観客まで、構成員の目の届く範囲の活動によって成り立っており、それが強みです。その実態に則した捉え方が重要なんだと思います。

蓬萊 だから大楽さんの言っていることは、表現媒体としては元々演劇は一度に多人数にアピールする様な存在じゃないわけですよ。せいぜい1公演200から400ぐらい。少ないんだけど濃密な時間を積み上げていくということが演劇としてあるべきだし、地域演劇としての価値だと思うんです。でなきゃ映画とかに所詮負けていくわけですよ。

今泉 今の世の中を考えると、人と人とのつながりがものすごく希薄になっている。2、3年前に高校演劇の京都大会があったでしょう。びっくりしたのは創作劇だけ出てくるのが高校生と先生だけ、家族も出てこない、そういう繋がりしか持てないのかな。

蓬萊 地域を扱ったもの即ち地域性という捉え方は非常に矮小化していると思う。それより、アマチュア演劇が無くなってしまった風景を考えますね。素朴であっても何か表現したいという欲求に対しての受け皿がなくなってしまう訳ですよ。兵劇協の加盟劇団がその時々果たしてきた役割があると思うんですが、そこをもう少し考える機会を創っていければ。

村井 5年後に劇団が無くなるとして、後5年ある訳じゃないですか、じゃあ何を残せるか、その5年間で準備をしようと思った時にどんなアイデアが出てくるか。そんなことを考えたら少し未来が見えてくるかなと。

蓬萊 例えば村井さんはどんなイメージを持っていますか。

村井 僕が芝居をしているということを、周りに広めるところを考えています。地域で何かやる時に、そういえば、あそこの村井は芝居をしていたぞ。相談出来るんじゃないかと。そうすると繋がりも出来てくるし、さらにはチケット売りにもと、考える訳ですよ。



森 兵劇協が兵庫県にあることを先ず知ってもらわないと次に進んでいけない。8年後には、兵劇協創設50周年を迎えるし、合同公演などを検討していくことで兵庫県にはこういう劇団があるんだと知ってもらって、協議会として力をつけていく。だから兵劇協を知ってもらうために何をやるかが、この協議会の活動の中心になっていくと思います。



書記／平野拓



加 盟 劇 団 活 動 状 況

神戸自由劇場

今年度は、私たち劇団にとって、再度の建て直し年だと思っています。劇団員の減少、それは現在の、働く仲間たちにとって厳しい社会情勢、加えて「演劇」に関心を抱いても、最近の風潮は「劇団活動」の中まで入ろうとはしない。とは言え、これまで幾多の困難を乗り越え、活動を続けてきた「兵庫県劇団協議会」の仲間の方々の期待を裏切らないように、何とか頑張って進んでいこうと思っています。現在の劇団員は、客演その他で「演劇活動」から離れてはいません。その力を再度結集し、まずは来年度の「神劇まわり舞台」への参加公演です。そのために、舞台参加への仲間、そして劇団員を募集しています。ご連絡ください。「劇団」をこれまで育てて戴いた観客の皆様、「兵庫県劇団協議会」の仲間の方々、よろしくお願いたします。



2003年5月「霧の夜の訪問者」より

劇団ここから



2009年第24回公演
「ブンナよ、木からおりてこい」より

「劇団ここから」は、今年創立25周年を迎えました。その記念公演第1弾として、4月に「劇団ここ从小劇場」最深（松岡一三作・演出）を上演、皆様から好評をいただきました。第2弾は、10月31日（日）加古川市民会館にて第25回公演「秋日狂乱」（八木柊一郎作・戸野本和久演出）を上演いたします。夫の定年退職日に次々と起こる騒動をコミカルに描きながら、家族の様々な愛の形や生き方についてちょっぴり考えさせられるお話です。演劇教室は、9月にシニアクラス第6期・23年3月に一般クラス第19期を開校します。節目の年を迎え、劇団としても新たなステップへ飛躍したいと思っています。皆様、パワーアップした私たちを觀に、どうぞ加古川にお越し下さい！

劇団四紀会

早くも15回目を迎えた新開地小劇場、記念公演として4年半ぶりに『道』を再演。続いて、2年前にやはり小劇場で上演した『かあちゃん』を、おやお劇場例会公演として再び。演劇鑑賞会の協力も頂き、貴重な経験となりました。

夏の家族劇場は、「虹の彼方に」で知られる『オズの魔法使い』に挑戦。超ベテランから子役まで登場し、夢の舞台を目指します。新開地小劇場9月公演は、松竹新喜劇の傑作『八人の幽霊』。名舞台にどこまで迫れるか注目です。

そして注目と言えば、2010年を締めくくる市民劇場公演に、劇団若手：吉田業の作・演出によります『ショウ=ガール』が登場。20代感覚で描いた森鷗外の『舞姫』が観客の心をどう捉えるか御期待下さい！



2010年新開地小劇場「道」より

劇団自由人会

“未来を担う子供達が、演劇を通じて心豊かに成長してほしい”という想いのもと、全国の学校巡演を中心に活動を展開しています。そして、設立から約10年後には約2,600ステージを突破(年間平均約260ステージ)。これは、子供達と私達と同じ劇場空間で感動体験を創造、共有することができ、その感動の輪が全国に広がっていったのだと確信しています。これらの地道な活動が実を結び、2008年度から文化庁主催「本物の舞台芸術体験事業」(現 子どものための優れた舞台芸術体験事業)の団体にも認定されました。この事業は、子供達が優れた舞台芸術を鑑賞し、実演指導などを通じて舞台などに出演してもらうものです。舞台芸術に身近に触れる機会を提供することで、子供達の芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うことに少しでもお役立ちできればと願っています。この他にも、教育委員会、おやお劇場・こども劇場、公立文化施設の主催事業などで全国各地を巡演しています。



「キネマらぶそでい」より

神戸職演連



朗読劇「ぼく生きたかった」より

私たちは、神戸を中心に働きながら、もしくは退職後の方が集まってお芝居づくりをしているアマチュア演劇サークルです。

毎週土曜日、もしくは日曜日の14時から17時ごろまで神戸市中央区下山手通99丁目の自前の稽古場で練習しており、年1回のペースで本公演を行っています。

演劇暦60年以上の80歳を超える大ベテランから40歳代の現役労働者を中心に、残念ながら今のところ、若い人がいませんが、家庭的な雰囲気の中、和気あいあいと活動しています。サークル員はいつでもどなたでも募集中です。

神戸ドラマ館ボレロ

私たちは、沢山の方々の応援を受けながら毎年1回、十分な稽古期間を取り、試行錯誤を重ねながら公演を続けている「アマチュア劇団」です。演劇を創る事は楽しくもあり、しかし苦しくもありますが、やはり創造する喜びは何者にも替えがたいものです。その喜びをバネにしてねばり強くがんばっています。今日の情勢の中で演劇を続ける事は勤労者にとってはなかなか厳しいですが、小さいながら今ある常用稽古場を活かして、週3回の稽古を基本にして進めております。入団は随時受け付けております。経験、年齢、性別、国籍は不問です。創る喜びを一緒に共有しましょう。



2009年「歌わせたい男たち」より

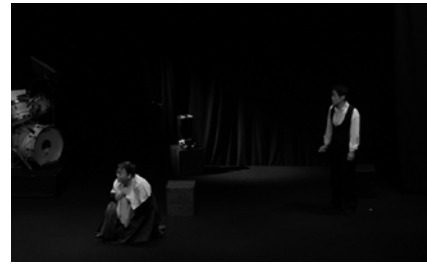
神戸ドラマ倶楽部

神戸ドラマ倶楽部は「楽しく、自由に、わがままに」を掲げて、雑事に縛られることなく一人一人の好きな芝居を思うがままに創っていきたい！その理念を持って震災の後立ち上げました。

チェーホフ、ストリンドベリといった過去の名作から「奇跡の人」のように一般的によく知られている作品、そして日本の現代作家の脚本までいろいろな作品に挑戦していただきたい年一回のペースで公演を行っています。

そして本公演の合間に、パントマイムの為の一人芝居や子供たちを主役とした体験児童劇団などプロデュース公演しています。また不定期ですが演劇教室を主催して演劇のなじみのなかった方々に芝居の楽しさを実感して頂いています。劇団員それぞれの演劇に対する情熱を大切にしてみんなで膨らませそれを高め発表する。それが神戸ドラマ倶楽部です。

所在地は明石となっていますが稽古場所は主に神戸の貸スペースを利用しています。



2009年「TO IN THE WOODS」より

劇団道化座



2010年3月「約束」より

劇団道化座はお蔭様で創立 60 周年を迎えました。現在、60 周年記念公演を展開中です。第 1 弾は 2 月に好評につき追加公演の「スーホの白い馬」、第 2 弾は 3 月新神戸オリエンタル劇場でシリーズ《家族》Ⅲ「約束」。第 3 弾は 9 月東京の座・高円寺で昨年上海で好評の「オハヨウ、母さん!!」を上演、同 9 月兵庫県立芸術文化センターで第 4 弾「幸せのゆくえ」、第 5 弾は 12 月に新神戸オリエンタル劇場での 60 周年メイン公演シリーズ《家族》Ⅳ「あした天気になあれ!」です。震災から 15 年、劇団道化座は 60 歳を迎え、今日も元気に頑張って参りたいと存じます。皆々様とともに祝っていただきたく、応援をよろしくお願いたします!!

劇団どろ

昨年 9 月に 31 年使った大開の稽古場を出て、大正筋に移転しました。新しい稽古場は前の 1.5 倍の広さ、10 月 31 日には 100 人が集まりお披露目パーティーを開き、別役実の『トイレはこちら』を上演、歌や演奏でお祝いました。12 月には朗読劇『ガザ 希望のメッセージ』を KAVC で上演。パレスチナ・ガザの現状を報告した朗読劇は聞く人に強い衝撃を与えました。

今年 5 月には再び別役実の『受付』を新稽古場で上演しました。今年度の神劇まわり舞台は 2011 年 1 月 22、23 日にモリエールの『いやいやながら医者になれ』を上演します。地元商店街を盛り上げるため劇団の近くのアスタ 4 番館にある db シアターで公演します。ご期待下さい。



2009年「動員挿話」より

兵庫県立ピッコロ劇団

“兵庫県立ピッコロ劇団”は、1994年に設立された全国初の県立劇団です。岩松了（劇作家・演出家・俳優）を劇団代表に迎え、全国公募により選ばれた劇団員35名を中心に、公演活動はもちろん、ピッコロ演劇学校・高校・大学等への講師の派遣、子どもを対象としたワークショップの実施など、地域の演劇指導・普及活動にも積極的に取り組んでいます。

2010年2月には、関西で活躍する俳優たちと共に、大作「真田風雲録」を上演。6月には、地元尼崎を舞台にした、劇団員の書き下ろし作品「あまに唄えば」を劇団代表岩松了の構成・演出で上演するなど、地域の力を結集した舞台創りに挑戦、地域の芸術・文化創造を牽引する劇団として幅広い活動を展開しています。



2010年「真田風雲録」より

劇団風斜

昨年の活動は、シェイクスピアの大作『タイタス・アンドロニカス』を上演した後、倉持裕作『バット男』をイカロスの森で上演。続いて、裁判員制度の開始に合わせて、名作を脚色した『心正しき12人の日本人』を上演し、この55回公演で神劇まわり舞台に参加。打止めの56回公演は、12月にイカロスの森で、矢代静一作の『淫乱斎英泉』を上演しました。



「心正しき12人の日本人」稽古風景

今年の活動としては、4月23日～25日に、“風の前の雄鶏シリーズ”第5弾、ただ今絶好調の本谷有希子作『幸せ最高ありがとうマジで!』をイカロスの森で上演後、57回公演として、8月6日～8日にKAVCホール、チェーホフの『三人姉妹』を越えるケラリーノ・サンドロヴィッチ作『わが闇』を上演。さらに、12月17日～19日には同ホールで、58回公演・神劇まわり舞台参加作品、黒テントの山元清多作『プレヒト番外編 隠し砦の肝っ玉』の上演を予定しています。

劇団プロデュース・F

劇団プロデュース・Fの2010年は、1月15～17日の「注文の多い料理店」と「注文の少ない料理店」の二本立てによる第55回アトリエ公演で幕を開けました。オリジナル劇中曲を出演者が生演奏というミラクルなおまけつきで、ファンタジックでロマンチックな舞台となりました。3月には朗読劇「ラブ・レター」（浅田次郎／作）を上演、好評をいただきました。この後も、7月、9月、12月に朗読劇公演をしながら、来春の第56回アトリエ公演に向けて、劇団員を募集しつつエネルギーをたくわえていきたいと思っています。

今年も、課題は劇団員を増やすこと。芝居づくりに興味あるなあというあなた、ぜひ一度、Fアトリエをのぞいてみてください。



2010年「注文の多い料理店」より

劇団自由人会

代表/森もりこ 構成員/20名
 〒655-0047 神戸市垂水区東舞子町7-17
 舞子ビル4F
 TEL.078-784-3701 FAX.078-784-3610
 HP/http://www.jiyuujinkai.jp
 e-mail/kobe@jiyuujinkai.jp ①

劇団道化座

代表/須永克彦 構成員/13名
 〒657-0845 神戸市灘区岩屋中町4-4-7
 TEL.078-803-2458 FAX.078-803-2459
 HP/http://www.kcc.zaq.ne.jp/dougeza
 e-mail/dougeza@kcc.zaq.ne.jp ⑦

兵庫県立ピッコロ劇団

代表/岩松了 構成員/35名
 〒661-0012 尼崎市塚口町3-17-8
 TEL.06-6426-8088 FAX.06-6426-1943
 HP/http://hyogo-arts.or.jp/piccolo/gekidan/index.htm
 e-mail/gekidan@hyogo-arts.or.jp ⑧

劇団風斜

代表/蓬菜裕史 構成員/6名 ②
 〒673-0005 明石市小久保120-55-B205
 TEL.078-921-2345 FAX.078-921-2345
 HP/http://www.medianetjapan.com/2/20/drama_art/fusha/
 e-mail/gekidan_fuusya@hotmail.co.jp

神戸職演連

代表/奥田康雄 構成員/9名
 〒650-0011 神戸市中央区下山手通9-9-7
 TEL.078-351-6969 FAX.078-351-6969
 HP/www.hyogekikyo.com
 e-mail/m-suzaki@s5.dion.ne.jp ⑨

神戸ドラマ倶楽部

代表/谷川達也 構成員/5名 ③
 〒674-0065 明石市大久保西島86-1-214
 谷川方
 TEL.078-947-0706 FAX.078-947-0706
 HP/http://kobedrama.hp.infoseek.co.jp/
 e-mail/ta1ni2ga3wa@yahoo.co.jp

神戸ドラマ館ボレロ

代表/三村省三 構成員/3名
 〒650-0011 神戸市中央区下山手通9-9-7
 TEL.078-361-9870 FAX.078-361-9870
 HP/www.hyogekikyo.com ⑩

神戸自由劇場

代表/鎌田紀子 構成員/3名 ④
 〒675-0018 加古川市野口町坂元435-1
 TEL.0794-22-2770 FAX.0794-22-2770
 HP/www.hyogekikyo.com

劇団四紀会

代表/村井伸二 構成員/29名 ⑪
 〒650-0022 神戸市中央区元町通2-9-1-612
 TEL.078-392-2421 FAX.078-392-2422
 HP/http://www15.ocn.ne.jp/~shikikai/
 e-mail/shikikai@rose.ocn.ne.jp

劇団ここから

代表/橘美恵子 構成員/12名 ⑤
 〒675-0068 加古川市加古川町中津119-7
 TEL.079-421-6029 FAX.079-421-6029
 HP/http://www7a.biglobe.ne.jp/~gekidan_kokokara/idx.html
 e-mail/kokokara@harima.eeyo.jp

劇団どろ

代表/合田幸平 構成員/10名 ⑫
 〒653-0042 神戸市長田区二葉町5丁目1-1
 アスタくにつか5番館203
 TEL.078-641-0045 FAX.078-641-0045
 HP/http://www33.ocn.ne.jp/~gekidandoro/
 e-mail/k_goda1@mac.com

劇団プロデュース・F

代表/宇佐見吉哉 構成員/8名 ⑥
 〒670-0012 姫路市本町233岸田ビル3F
 TEL.079-285-2884 FAX.079-285-2884
 HP/www.hyogekikyo.com
 e-mail/weiqi_osaki@xsj.biglobe.ne.jp

